

小説 KUCHIBASHI 2022

甲山 羊二

☆

丁寧な説明を終えたばかりの、若い女性店員の人懐っこい表情が、ここにきて急に神妙なものに変わった。「ただ、この〈KUCHIBASHI 2022〉につきましましては、在庫に限りがございます。メーカー側の生産ラインの事情により、次回の入荷は三ヶ月先になる予定でございます」

「そんな、三ヶ月先だなんて。やだよお」

娘の悲鳴のような小さな啜きが店員の声のすぐ後に続いた。

「ポイントカードをお持ちでございますしたら、現在のポイント数に応じて、さらにお値引きも可能でございます」

店員は元の表情で、改めてそう切り出した。

「よろしければ、すぐにポイントをお調べして参りますか……」

「ねえ、ママ。ポイントカードだって」

妻は娘に促されるまま財布からカードを取り出すと、軽く会釈をしてそれを店員に差し出した。

「少々お待ち下さい」

笑顔でポイントカードを受け取った店員は、そのまますぐに小走りでレジの方へ向かった。

その間、僕はもう一度〈KUCHIBASHI 2022〉を眺めた。

淡いオレンジ色をした〈KUCHIBASHI 2022〉。嘴としてはもちろんだが、それ以上に多くの機能を兼ね備えた優れたもの。品質も最高であり、その割にはかなりお手頃な価格であるという。ブラウザ。デジタルカメラ。ワゴンセグ。ナビ。メーカーの希望価格税込五五〇〇〇円也。しかしこれはもはやただの嘴ではない。

店員が戻って来た。

「大変お待たせ致しました。まず、カードをお返し致します」

まだほんの少しだけ息が荒い。

「ポイントをお調べ致しましたところ、お手持ちのポイントは五〇〇〇ポイントで、全てお使いいただけます」

すと、お値引きは五〇〇〇円となります。はい。本日に限りまして、メーカー希望価格より二割のお値引きとさせていただきます」

「すごい。すごい。超安いよ」

娘は完全にその気になってしまっている。

つまりはこうである。本日に限り、価格は税込四四〇〇〇円也。さらに、ポイントを使い果たすことによつて税込三九〇〇〇円也。

「大切に使うのよ」

何やら妻もその気になっている。

「それでは、お手続きを致しますので、恐れ入りますが、カウンターまでお願い致します」

こうして、娘は念願の〈KUCHIBASHI 2022〉を手に入れた。

☆

嘴関連法の国会での審議は予想通り紛糾した。政権与党である限界党でさえ、法案の時点から賛成派と反対派に分かれて激しく対立した。

また、野党第一党である花畑党の枯葉代表は、貝雷総理に対して、党首討論でこれについて激しく追及し

た。

「総理、私にはあなたのお考えがまるで分からない。はつきり申し上げて理解不能です。国民に嘴の装着を義務付ける。おまけに、それに違反した場合の罰則規定まで設ける。総理、あなたは国民を馬鹿にしておられる。日本という国をどこまで愚かにすれば気が済むとおっしゃるのか。こうなれば、いよいよ国民に真を問う。それが筋ではありませんか」

「馬鹿になどしておりません。必要であるからこそ、国民の皆様にお願いを申し上げます、ただその一心でございませぬ。ともかくにも、嘴の必要性というものを、しっかりと認識していらつしやるはずです。国民を馬鹿にしているなどは極めて無礼な発言。即刻取り消していただきたい」

さらに、東京都の今輪知事は定例の記者会見でこう述べた。

「嘴装着につきましては、何と申しますか、極めてピラミッド風浪漫に満ち溢れているように感じる次第でございませぬ。ただし、同じ嘴でございませぬならば、良いものを身に付けたいという国民感情には逆らえないとも思えるのでございませぬ。やはり、化粧品と同じく、国産の嘴に限ることになるのではないでしょう

か」

一方、地方政党中央妄進の会の陸津大阪市長は、記者会見で次のように述べた。

「嘴装着には絶対反対ですわ。そんなもの決まってるやないですか。嘴は先が尖つとる。尖つてない嘴なんて、僕はそんなもの知りまへん。尖つたものは危ないし、そんなもん装着するやて、言語道断。カジノより酷い。盲進の会としては、このまま黙つてはおれまへんな。ほんまに僕は戦いますよ。こうなれば中央を倒すしかありまへんわ」

しかし、中央が倒れることはなかった。反対派を強引に押し切るかたちで、結局嘴装着法は可決した。

国民は嘴を求めて長い行列をつくった。メーカーもまた競つて嘴の生産を続けた。そうして、嘴はより進化し、より多くの機能を持つものが次々と登場するようになった。

☆

※嘴に係る法律

この法律は、国民の健康で文化的な生活を保障するために施行される。いわれのない風評が流布されるこ

ともなく、国民ひとりひとりが発言すべきこととそうすべきでないこととを明確に一線を画して、平和で豊かな生活を行うことを目的とするものである。

施行後は、国民が嘴によつて自らを律することで、先に明記した生活の実現に向けてひとりひとりが誠心誠意努めなければならぬ。

抜粹

第一条 外出の際は何人も必ず嘴を装着しなければならぬこととする。

第二条 他の者の嘴に係る根拠のない批評を繰り返すことは厳に禁じる。

第三条 装着についての根拠のない批判を繰り返すことを厳に禁ずる。

第四条 第二条並びに第三条に係る罰則規定を次のように定める。

その一 他の者の嘴を批判した者は、一五年以下

の懲役とする。
その二 嘴装着への批判をした者は、二五年以下の懲役とする。

第五条

嘴のシリアル番号は各人が居住する関係係に届け出ることとする。紛失及び新規の場合も同

じとする。

第六条 第五条に係る罰則規定を次のように定める。

その一 各届けを故意に遅滞した場合、第四条
その一の規定に準ずる。

第七条 嘴を製造加工並びに販売する者は、総務省の
審査を経た後、都道府県知事がそれを許可する
ものとする。

第八条 第七条に係る罰則規定を次のように定める。

その一 審査において故意に不正を働いた場合、
官報にその名を記すとともに、その日から三年
間の公民停止とする。

☆

法律の施行後、国民は真面目に嘴を装着した。不平
や不満を口にするものは誰もいなかった。嘴装着法は
徹底した法律だった。外出の際の装着はもちろんだが、
嘴を装着することへの不平や不満は、極めて厳しい罰
則規定により禁止されていたからだだった。

嘴はマスクの要領で誰もが簡単に装着することがで
きた。ところがしばらくすると、罰則規定に抵触する
者や、嘴によるトラブルなどが発生し、それらが大き

な社会問題となっていた。

事実、車内では嘴による注意を促すアナウンスまで
流されるようになった。

「毎度、ご乗車ありがとうございます。お客様にお願
い致します。嘴を装着したままで、他のお客様などに
対し、むやみに突いたり、噛み付いたりなどの危険行
為はお止め下さい。もちろん、車内での装着解除など
の違反行為もお止め下さい。安全で快適な車内環境作
りと、嘴による幸せ作りに、皆様のご理解とご協力を
お願い致します。ありがとうございました」

嘴どうしの衝突も起こった。それを防ぐために開発
されたのが「エアエッグ」だった。

衝突寸前のところで、突然嘴の先端に大人の親指の
先くらいの小さな卵が誕生する。中には空気が充滿し
ている。その卵が相手の嘴とこちらの嘴の両方を守る。
もちろん嘴が誤って相手の身体に触れるような場合も、
自動的に作動するとある。

確かにその効果は抜群だった。それはまさに命の卵
だった。

一方では、大量に廃棄される嘴をどう処理するの
かについて、新たな問題が浮上した。

嘴は使い捨て同然だった。通常のゴミ袋に入れた場

合、先端の鋭さで袋には穴が開いた。また、収集する者が誤って怪我をするという事態を憂慮した各自自治体は、先回りをして、嘴専用のゴミ袋を有料で各家庭に配布した。

☆

嘴の正しい装着による安全を徹底する目的から、政府はその諮問機関として、「嘴安全委員会」の設置を決めた。また委員長には嘴工学が専門で、その第一人者として知られる、頂点大学教授の出鱈目氏が就任することとなった。

「現在、社会問題になっているところの、嘴装着の安全性については、基準そのものが極めて曖昧であり、それによる国民の皆様の不安は、さらに新たな問題を引き起こしかねない、言わば重要な岐路に立っていると思われます。

専門的な観点でお話し致しますと、嘴の装着によって新たに蓄積されて、国民の持つ生活に関わるエネルギーが無駄に漏れ出すという懸念は現段階においては払拭されたものと考えております。しかし、また一方ではそれらエネルギーが、今度はストレスという形で

蓄積され、消費されずに残存することによって、突然の爆発という、あつてはならない事故に結び付くことも予想されます。

そこで委員会としましては、嘴に関わる各団体との連携を図りながら、さらに知恵を拝借しつつ、事故のない安全な嘴装着を、近い将来に必ず実現するべく、議論を重ねてまいります」

しかし、問題は止まなかった。違法な嘴がネット販売されるなど、密売は後を絶たず、装着するだけで気分が高揚するといった事故や事件が急増した。

事態を重く見た警察庁は、脱法嘴の厳しい取締りにようやく本格的に乗り出した。また、文部科学省は『楽しい嘴』と題した教本を作成、全国の小中学生に無料配布するとともに、ホームルームなどを活用し、嘴についてクラスで話し合う時間を設けるよう通達した。

書店では、嘴に関する書籍がずらりと並んだ。けれども嘴を批判する内容のものなどはひとつもなかった。嘴はいつも正しい。問題はそれを使用する国民の側にある。それが、全ての書籍の最終結論になっていた。

そんな折、とてつもない事件が起こった。それによって国民は恐怖のどん底に落とされることになった。

それは人間の力が全く及ばない出来事だった。事件

は次々と起こった。もう手の施しようもなかった。もはや嘴は人間を支配する完全なる存在へと成長を遂げていたのだった。

結局、出鱈目氏は委員長長辞任を表明した。そして国民の前から姿を消した。

☆

迦楼羅天とはインド神話に登場する神鳥のことである。仏教に取り入れられて、仏法を守護する神として崇められることになった。

様態は、まず人間の形でありながら鳥の頭を持ち、そこには天狗に似た嘴と鋭く大きな目が備わっている。さらに身体は鎧のような武具を身に付けていて、後方からは翼を見ることが出来る。まさに鳥頭人身有翼といったところである。

毒蛇を主食常食とし、魔物から人間を守っている。また魔物がもたらす風や雨を止めることもできる。まさに迦楼羅天は人間に益をもたらす神なのである。

もちろん、私たちはそれを現実を目にすることはできない。あるとするならば、奈良の興福寺に安置されている迦楼羅像であろうか。京都の三十三間堂でもそ

れに似たものを見ることが出来るかもしれない。いずれにせよ、私たちは動く迦楼羅天を見ることは決してないのである。

最初、人はそれをひとつのファクションだと考えていた。確かに、天狗のような嘴と鋭く大きな目、鎧も翼も、全てがこれまでにないものには違いなかった。それでも、誰ひとりその奇抜さに疑いを持ち、それを公言するような者はいなかった。

ファクションはまたたく間に広がった。それらは普通に歩き、普通に走り、普通に座り、これまでと同じ生活をしているように思えた。けれども、やはり何かが違うていた。そして何かが失われてしまっていた。それでも人は沈黙していた。それらは、もはやファクションでも何でもなかった。人はそのことを十分知りながら、それでもひたすら沈黙を守り続けた。そしてあまりの恐ろしさにただただ身体を震わせた。

数か月後、政府は「嘴が人間を支配している」という事実を公式に発表した。そして「今後はさらなる成長を遂げる」という予測まで公表した。一方で、「直ちに、嘴が国民に害を及ぼすという可能性はない」と付

け加えた。

次々に専門家が現れては、難解な用語を用いながら、嘴の実効支配の不完全さについて繰り返した。それでも、男女も問わず、あまりにも奇抜すぎるそれらは、言葉を失ったまま生き続けるより他なかった。

☆

国民の皆様

「私たちは、人間としての形を保ちながらも、極めて人工的な嘴という物質によって、もはや頭は鳥となり、さらには翼を背負い、挙句の果てには鎧までも身に付け、周囲から恐れられるに至った、鳥頭人身有翼的存在でございます。一部には、私たちを迎楼羅天（からてん）の再来などと論じる動きさえあるとのことでございますが、もちろん私たちは神でも仏でもなく、由緒正しい真正正銘の、人間以外の何者でもございません。先般の総務省からの発表では、実に私たちのような存在は、既に日本の人口の半数以上を占めているとのことでございます。この勢いでは、近い将来、全ての国民が私たちと同じ姿形、すなわち人身有翼的存在となるのは間違いないと思われます。そこで、僭越

ではございますが、そのさきがけという立場で、国民の皆様には人身有翼的存在の意義についてご説明を致したく、こうして筆をとるに至ったという次第でございます。これにより、人身有翼的存在についてのご理解を深められ、ひとつの指針として受け止められることを、心より切望致す次第でございます。

当初、私たちは嘴の装着がこうした不可解な現実を引き起こすなど、全くもって予想だにしておりませんでした。私たちは真剣に悩みました。集団による自死を企てようとさえ致しました。何度も筆談に合議を行いました。しかし具体的な結論を出すことは何ひとつできませんでした。

私たちは話すことはできません。また私たちの指はパソコンのキーボードを叩くことをできないくらいに、太く大きく長いものへと変化してしまいましたから、手紙のやり取り以外に、私たちの意志を伝達する手段を持ち得なかったのでございます。しかし、逆にそのことが、結果として私たちの新たな希望を与えたのでございます。

人身有翼の人間に与えられた新たな希望。それは時間でございます。十分な思惑を練るための貴重な時間。生きることとは。また真の幸せとは。そういった思惑

から相手への配慮が芽生え、さらには生きとし生けるものどうしの連帯が深まる。そうでございます。私たちは本物の絆を手に入れたのでございます。

もう恐れることなど何もございません。安っぽい上辺だけの、しかも一時の、形だけの心にもない絆など、十分でございます。真摯な思索こそが、それこそが真の絆へと導かれる唯一の道、そう私たちは確信したのでございます。

国民の皆様。どうか一日も早く人身有翼の人間となり、そこから新たな一步を踏み出されますことを、心から祈念する次第でございます」

☆

「次は、皆様お待ちかね、嘴予報のコナーです。嘴ステーションの脆井さんと呼んでみましょう。脆井さん」

「はい、脆井です。それでは、早速今後の嘴予報をお伝え致します。まず嘴支配の勢いですが、やはり留まるところを知りません。しかも、それに伴って、最近では新たな問題も発生しているようです。

それは、念願叶って人身有翼の人間に見事変化を果

たしたものの、思慮そのものに不慣れなせいか、本物の絆に至らずに、孤立や孤独に陥るというケースが急増しているということです。やはり、人間の自身など結局は変わりようなどないのでしょうか。よって、思慮深い優秀な人身有翼の人間の確率は今後も一〇%以下の予想です。

ちなみに、永田町や霞ヶ関周辺ではその予兆すら伺えません。さらに、嘴を装着したかれらの姿などこれまで一度も目撃されていないのが現状です。いったい、いっどこでどうやってどんな嘴を装着しているのでしょうか。残念ながら、それを確認できる確率は透き通るくらいに今後も〇%の予想です。依然、高いレベルの人身有翼の人間が待ち望まれます。以上、嘴予報でした」

翌日、脆井の姿は画面から消えていた。そして二度と姿を現すことはなかった。

その後も、〈KUCHIBASHI〉は次々とバージョンアップを重ね、嘴の中の嘴として爆発的人気を維持し続けた。

了